

果樹を加害するカメムシ類の生態に関する研究

(第1報) 予察灯におけるチャバネアオカメムシの年次変動

宮原 実・山田健一・行徳直己

(福岡県立園芸試験場)

MIYAHARA, M., YAMADA, K. and GYOTOKU, N.
Studies on the ecology of some stink bugs infesting fruits.

1. Annual fluctuation in the numbers of brown winged green bug attracted to the light trap.

チャバネアオカメムシの生態については不明な点が多く、その上、発生時期や発生量は年により著しく変動するので、発生を予測するのが極めて困難な害虫とされている。そこで本虫の発生予察の一資料を得るため、過去の予察灯による誘殺状況を整理し、各年の発生型について検討を加えたので報告する。

調査方法

福岡園試内に設置した 100W 高圧水銀灯による昭和38年から14ヵ年間の誘殺状況と、浮羽郡吉井町に設置した 60W 白熱灯による昭和28年から23ヵ年間の誘殺状況により発生型を分類した。発生型の分類は、誘殺量がピークを形成する時期別に、7月までにピークがある型を前期型、8月以降のものを後期型、前期・後期とも同じようなピークがみられるのを双峰型、発生が少なく明瞭なピークがないものを無峰型とした。

調査結果と考察

福岡園試では第1表のように、前期型は昭和41, 46, 50年の3ヵ年、後期型は昭和39, 40, 42, 43, 45, 48, 49, 51年の8ヵ年、双峰型は昭和38年のみ、無峰型は昭和44年, 47年の2ヵ年であった。

吉井町では第2表のように前期型は昭和32, 35, 37,

第1表 チャバネアオカメムシの発生型 (福岡園試)

年度	4~7月		8~11月		全 期 発生数	発生型
	発生数	割合 (%)	発生数	割合 (%)		
38	1,169	46.9	1,324	53.1	2,493	双 峰
39	335	11.7	2,533	88.3	2,868	後 期
40	696	24.0	2,207	76.0	2,903	後 期
41	3,693	70.6	1,537	29.4	5,230	前 期
42	81	4.5	1,710	95.5	1,791	後 期
43	1,463	40.6	2,142	59.4	3,605	後 期
44	714	62.1	436	37.9	1,150	無 峰
45	463	10.4	3,971	89.6	4,434	後 期
46	4,148	78.8	1,115	21.3	5,263	前 期
47	376	38.3	605	61.7	981	無 峰
48	527	18.1	2,380	81.9	2,907	後 期
49	721	29.4	1,732	70.6	2,453	後 期
50	7,594	74.1	2,658	25.9	10,252	前 期
51	115	15.1	646	84.9	761	後 期

38, 41, 44, 46, 50年の8ヵ年、後期型は昭和28, 31, 36, 39, 40, 42, 43, 45, 48, 49年の10ヵ年、双峰型は昭和29年のみ、無峰型は昭和30, 33, 34, 47年の4ヵ年であった。

第2表 チャバネアオカメムシの発生型 (吉井町)

年度	4~7月		8~10月		全 期 発生数	発生型
	発生数	割合 (%)	発生数	割合 (%)		
28	16	27.1	43	72.9	59	後 期
29	23	43.4	30	56.6	53	双 峰
30	28	51.9	26	48.1	54	無 峰
31	7	5.7	115	94.3	122	後 期
32	118	62.4	71	37.6	189	前 期
33	13	72.2	5	27.8	18	無 峰
34	3	17.6	14	82.4	17	無 峰
35	104	67.5	50	32.5	154	前 期
36	18	11.5	138	88.5	156	後 期
37	88	67.7	42	32.3	130	前 期
38	75	81.5	17	18.5	92	前 期
39	24	18.8	104	81.3	128	後 期
40	26	37.7	43	62.3	69	後 期
41	82	82.8	17	17.2	99	前 期
42	4	4.0	95	96.0	99	後 期
43	36	43.0	61	57.0	107	後 期
44	37	77.1	11	22.9	48	前 期
45	19	28.8	47	71.2	66	後 期
46	56	68.3	26	31.7	82	前 期
47	20	47.6	22	52.4	42	無 峰
48	6	3.1	185	96.9	191	後 期
49	20	22.0	71	78.0	91	後 期
50	56	62.9	33	37.1	89	前 期

以上のように両地間の発生型はほぼ一致したが、それぞれの各年の発生型、発生量はまちまちであり、その間に一定の傾向、規則性は見られなかった。

このような発生の変動の原因については、本虫の発生生態について不明な点が多いため、現状では全く検討する手がかりもない。しかし、気象条件および幼虫の主たる繁殖植物であるヒノキヤスギの穂果の多少、さらには天敵類の活動などが複雑に関係しているものと思われる。今後、これらの問題についてはさらに検討を加えたい。